高原好日の思い出から

――加藤周一『高原好日』最終回について――

ルボフスキ　伊藤　綾

『高原好日　20世紀の思い出から』は加藤周一が軽井沢を舞台に交流を持った人々についてのエッセイであるが、そもそも何を読者に示そうとしているのだろう？　今でこそ自らの交友関係をSNSを通して世の中に披露することは何ら珍しいことではなくなったが、著名な知識人がセミクローズドな人脈内での文化的に高度で豊かなやり取りをファンにチラ見せした作品として読むべきなのか？　しかし、よく読むと、取りあげられている人は有名人とは限らないし、実は同時代人とも限らない。加藤はなぜ自らの交友関係をテーマにする必要があったのか。「そもそも、人が誰と仲良くしているかなんて、そこまで面白い話題なのかしら？」私は加藤周一とは個人的面識がなかったので直接そう聞いてみることはできなかった。しかし、彼が人々と取り結んだ関係がどういう性質のものだったか、積極的にその内実を世に明かそうとする姿勢にどんな価値があるのか、それを考える機会は与えられたと思う。

それは、私の場合は、樋口陽一氏との親交に恵まれたためである。『高原好日』の最終回に登場するこの方は、学者なので、便宜上「樋口先生」とお呼びしているが、私は彼の指導学生ではないし、授業を聴講したこともない。実のところ、共通の知人を通して知り合い、話して、気が合ったから、友達になった人だ。日本の学校では奇妙なことかもしれないが、学界の一流の大御所、そもそも公人たる大学教師は、目下の学生にこそ必ず直ぐに返事をくれるもので、私が留学したフランスでは少なくとも

そうだった。それと非常に似た意味で、この方は私の問いかけに必ずすぐに返事をくださったので、これまで、一対一で、知人を交えて、大学内と外で、何度も語り合う機会に恵まれ、2011年の夏、私が欧州の大学に単身で赴任する直前には、樋口夫妻の追分の別荘にお招きを受けた。厨房でエプロン姿で迎えてくれ、加藤周一もこうして客人を自らの料理でもてなしたのだ、と、かの知識人との会食の思い出を反芻するかのように語り、私はそこで彼が加藤のひととなりを心から愛し、尊敬していることを感じた。

私は、加藤が『高原好日』の最終回で、彼との邂逅について「その楽しさはまことに換え難い」と書いていることに同意する。しかし、年齢も社会的立場も全く異なる加藤と私が彼に抱く印象が同じというのはどういうわけなのか。

この楽しさはどこから来るか？　加藤曰く、彼の中には「関心の広さと専門的知識の深さ」が共存しているからだが、それだけではないと思う。

それは、彼にある、人と対話する時の裏表のないさわやかで軸足の定まった姿勢とでも言うべきものだ。私が抱いたのは、一対一で私と話している時も、講演者として数百人の前で話している時も、「この人は同じだ」という印象である。彼には、たった二人きりで話し合っていても、まるであたかもそれを聴くものが側に多くいるかのように、語る姿勢が常にある。

彼は、加藤との共著『時代を読む　「民族」「人権」再考』を出版するにあたり、対話を「鐘を撞く」という行為に喩えた。彼にとって、加藤は「巨大な音量とゆたかな音色を持つ釣鐘のようなもの」であり、彼も「ながい間、自分なりの撞き方でひとり勝手に鐘の音色を聴いてきたのだが、こんどは本ものの鐘を撞く機会に恵まれることとなった」と書く（『本の窓』1997年5月号／Ludo ergo sum bis再録）。対話とは、相手の鐘と自らの鐘を共に響かせることである。鐘を撞く行為は、独り言、相手への阿諛追従、単なる情報交換ではない。その響き合いは、さらに大きな地平

に響き渡るものであるはずだ。

鐘を撞きつつ響きに耳を澄ますことは、世阿弥の離見の如く、常に演じている自分を高次から眺める二重の意識に貫かれているが、それは堅苦しい理論的戦略ではない。彼が対話を愉しむ様は、さながら重力を感じさせない足の運びで観るものを魅了する友枝昭世の舞のごとく軽やかである。

追分の夏の思い出を胸に、再び欧州に暮らすようになって10年以上が経った。もはや、日本の知識人が大いに享受した文化的爛熟を醸すヨーロッパ社会は、時折フランスのテレビで再放送される古い映画の中にしか存在しない。その社会の「先進性」が日本に憧れを抱かせることはもはやないし、グローバリズムを経由したこの世界には、個々の文化の通約不可能性が逆説的に相互理解の切り札となるような次元はもはや確保されていない。

それでも、かつて「西洋」という鏡の前で身繕いをしながら日本人が整えた「普遍」と、その醸造物たる「個人」や「近代的主体」なるものの価値が損なわれることはないように私には思われるのは、これら外来の概念の数々が、ひとりの人間のうちに内面化され、自然なふるまいとして体得され実践されていることを目の当たりにした記憶があるからだ。対話の愉しみは、戦後が何年になろうと、世界情勢がどう変わろうと、かわることはなかろう。

コロナ禍以降の世界の我々は、リモートで深く話した相手と実際にはほとんど会ったことがないという状況を普通に受け入れるようになったが、そのような状況を、société civile が持つ劇場性に常に敏感であり、友と美酒美食を堪能し対話を愉しむことにかけては、名手であるこの方はどのように思われるだろうか。

（るぼふすき いとう あや　ジュネーブ大学文学部講師）